様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成２５年　６月１４日現在

機関番号：３４５０３
研究種目：基盤研究（Ｃ）
研究期間：2010～2012
課題番号：２２５２０７７８
研究課題名（和文）　播磨における古代・中世寺院の造営背景と地域伝承についての考古学・歴史学的研究
研究課題名（英文）　Archaeological and Historical Study on the Background about Foundation of Temples and Regional Folklores: In the Case of Ancient and Medieval *Harima* Province
研究代表者
櫃本　誠一（HITSUMOTO SEIICHI）
大手前大学・総合文化学部・教授
研究者番号：90340893

研究成果の概要（和文）：本研究は、播磨一帯にみられる法道仙人伝承を手がかりに、古代・中世のこの地域の仏教文化の特色と、その社会的背景の解明を目的とする。①終末期古墳から古代寺院への推移と地域社会、②開基伝承からみる中世寺院の展開と山岳信仰、③地域伝承と歴史的景観、の３点から考古学・歴史学・景観学的な検討を加え、播磨地域における石棺や中世寺院、伝承地の集成を構築するとともに、法道仙人伝承と石の文化との密接な関係について見通しを得た。
研究成果の概要（英文）：It is well known that there are various regional folklore in *Harima* province. The present study aims to examine the characteristics of ancient and medieval Buddhistic culture and its social backgrounds in the case of the folklore about Indian Taoist *Houdou-Sennin,* who was believed as a great temple founder in *Harima*. In this study we focus on three problems as follows; (1) archaeological and historical survey on the relationship between *Kohun*(old mounded tombs) and ancient temples in this area 7th - 8th century, (2) historical survey on medieval temples and its foundational legends, (3) regional folklores and historical landscape which represents them. As a result, we got various data on the distribution of stone coffins, medieval temples and legendary places connecting with *Houdou-Sennin* in *Hyogo* prefecture, and we obtained some new hypotheses that the folklore of *Housou-Sennin* is closely related ancient megalith worship and regional mason.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2010 年度	1,600,000	480,000	2,080,000
2011 年度	900,000	270,000	1,170,000
2012 年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総　計	3,000,000	900,000	3,900,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：史学・考古学
キーワード：終末期古墳・古代寺院・地域伝承・開基伝承・中世寺院・GIS

１．研究開始当初の背景

研究代表者（櫃本）および研究分担者（魚津・中井）が所属する大手前大学史学研究所では、平成 20 年（2008）度に兵庫県教育委員会や、加古川流域の 14 市町教育委員会との共同事業として、「法道仙人と行基菩薩の

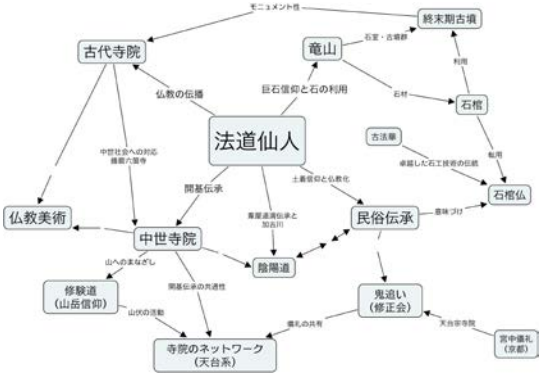
時代」展覧会（明石市立文化博物館で開催）の企画・開催に携わった。法道仙人とは、加古川流域一帯にのこる伝承にあらわれる人物で、孝徳天皇の時代（7 世紀中頃）に天竺より日本へ飛来し、法華山一乗寺（兵庫県加西市）を拠点に加古川流域に数多くの寺院を建立したといわれている。法道仙人によって開かれたと伝える寺院や、仙人の事績にまつわる伝承地はこの地域に数多くのこっており、いわば地域の歴史を表象する伝承的人物といえることから、この法道仙人、これに加えて明石市地域一帯で活動が知られる行基を題材にして、兵庫県加古川流域にのこる古代・中世の仏教文化や地域の民俗伝承を一般市民に紹介しようと考えたのであった。

この特別展の準備過程で、法道仙人の伝承や、それにかかわる寺院群などを調査していくうちに、この伝承的人物が、仏教文化もさることながら、地域の文化的アイデンティティとも濃厚にかかわる重要な役割を果たしているのではないかという問題意識を得るに至った。建築学の領域では、その場所にともなう歴史的経緯（履歴）や、実体・非実体を問わぬ諸々の特性を一種の人格に仮託したものとして＜地霊 *genius loci*＞という概念を提起して、建築的場所論や景観論が展開されている。伝承というと、事物の真偽を厳密に区別することからはじまる近代歴史学の観点からすれば、等閑視されがちではあるが、建築・景観論で展開されているこのような議論を参照するならば、地域の伝承自体が地域史に果たした役割、あるいは伝承そのものが、地域社会のなかで変容しつつも受け継がれていった事実を直視することは意義ある試みと考えられる。＜地霊＞たる法道仙人の中身を読み解くことは、地域史の解明にほかならず、地域の文化的アイデンティティの成立や解明に寄与するものと考えられるのである。

以上のような問題意識にたって、展覧会とあわせて開催した公開講座で講師をつとめた研究者との共同研究というかたちをとって、本研究を企画するに至った。具体的な研究領域としては、法道仙人伝承と直接関連する古代・中世をとりあげることとしたが、法道仙人の伝承地が石宝殿（兵庫県高砂市）のような巨石文化とも関連するように見受けられること、また、古代寺院の成立を考えるうえでは古代豪族との関わりも見逃せないことから、古墳時代末期（終末期古墳）まで時代対象をひろげ、参加した研究者の専攻分野を勘案して、終末期古墳・古代寺院・中世寺院の三つを主たる対象とし、これらと地域伝承との関連性を考察することとした。

２．研究の目的

本研究の目的は、法道仙人という地域にのこる伝承を手がかりに、そこから引き出される多様な歴史的・文化的問題系を明らかにしたうえで、考古学・文献史学・景観学の三分野の研究者の共同研究によって、地域の考古資料や歴史資料、そしてそれらが立体的に構成されたすがたとしての景観を分析・検討して、地域伝承として表象化される地域史の重層性を明らかにすることにある。地域史といってもその対象は漠然としているので、ここでは古代・中世寺院の造営背景に焦点をあてる。



図．法道仙人伝承から導き出される学際的な問題系

３．研究の方法

（１）課題の設定

加古川流域のみならず播磨地域は、古代寺院が濃密に分布する地域として夙に知られているところであるが、その厚い研究史をふりかえってみても、いまだに不明確な部分も多くのこされている。とりわけ、終末期古墳から古代寺院へ、古代寺院から中世寺院へといった問題は、普遍的な課題としてしばしば論及されるものの、具体的な考古資料・文献史料に即した検証は十分ではない。そこで、加古川流域を主たる対象として、①石材の利用と終末期古墳、②仏教の受容と古代寺院、③山岳信仰と中世寺院、の３点に集約して検討をおこなうこととした。この３点に共通するのは、天竺より飛来して法華山（兵庫県加西市）に居住し、生石大神（石宝殿の祭神）の供献を受けつつ寺院を建立してまわったという法道仙人の伝承にある。すなわち、竜山石で知られる石材と、霊場視されて数多くの寺院が建立された山地という、この地域特有の自然景観である。仏教の伝来から定着、変容（古墳時代末期から古代、中世）という時間軸を縦軸に、そして岩盤で構成される山地というこの地域の独特の景観的要素を横軸とみなすことによって、掲げた問題をもっとも統一的・効果的に検討する視点が得られると考えたからである。

（２）研究遂行の方法と体制

具体的な研究の遂行にあたっては、上述の３点の課題にもとづき、参加研究者を３班にわけて、おおよその担当領域を定めることと

した。もっとも、これは厳密なものではなく、適宜会議や連絡をとって、課題や成果の共有化をおこない、相互の意見交換や参加が可能となる柔軟性を確保できるようにつとめた。

①終末期古墳から古代寺院への推移と地域社会（主担当：櫃本・魚津・古市・梶原）

法道仙人と高砂の生石大神（石宝殿祭神）との挿話からうかがえるように、法道仙人伝承は石材の産地と密接なかかわりがあるように推測される。法道仙人開基寺院は別として、法道仙人の行動にまつわる伝承地（飛鉢伝承など）がのこっているのは、ほぼ高砂地域に限られるからである。一方で、古代寺院の造営背景を考えるには、古代豪族は看過することはできず、これはまた終末期古墳の分布とも関わる問題である。加古川流域にのこる竜山石製の石棺や利用石造物（石棺仏など）の分布を手がかりに、該地における終末期古墳の展開状況を検討する。また、古代寺院については、すでに分布や伽藍構造論、出土瓦をめぐる議論がおこなわれているが、寺院の立地という観点から整理検討をおこない、古代豪族の動向と比較対照しながら造営背景を検討する。

②開基伝承からみる中世寺院の展開と山岳信仰（主担当：中井・梶原・福井）

法道仙人が開基したと伝える寺院が加古川流域に数多くのこっていることはよく知られているが、その分布の状況、開基寺院の宗派や沿革など詳細についてはきちんと整理されているとはいいがたいのが現状であった。そこで、近世・近代以降に編纂された地誌類をもとに、まずは法道仙人開基伝承の寺院について、寺名や場所、沿革、宗派等の基本情報を集成する。先述した平成 20（2008）年度の特別展に係る調査の際に、同様の開基伝承が播磨では地域性をもって分布することがおおよそわかっていたので、聖徳太子や行基、空海など、法道仙人以外の開基伝承も集成する。以上の情報はまず播磨よりはじめ、丹波・摂津西部・但馬など周辺地域にも範囲を広げ、おおよそ兵庫県下の状況の解明をめざす。

以上のようなデータをふまえつつ、法道仙人伝承を持つ山岳寺院のいくつかについて基礎的な踏査を実施し、立地の状況についての考察材料とする。あわせて、開基伝承寺院の位置情報を GIS で利用するべくデータ化する。また、必要に応じて、兵庫県下における山岳寺院の調査を実施し、比較材料とする。

③地域伝承と歴史的景観（主担当：櫃本・魚津・中井・福井）

地域にのこる法道仙人伝承地の踏査を実施し、伝承地の地理的特徴、集落や山岳、河川、湧水などとの位置関係などに関する情報を収集する。これらを主として景観学的な観点から分析することによって、伝承地の歴史的・文化的背景や、伝承地としてのこってきたことの要因、また現代の地域社会における位置づけなどを考察する。踏査にあたっては、地理情報の正確な把握が必要であるため、GPS 機器を用いてデータを採取し、GIS ソフトなどで分析、データベース化をすすめる。

４．研究成果

（１）各課題の研究成果

①終末期古墳から古代寺院への推移と地域社会

当該地域は都市化が著しく、開発の過程で数多くの古墳が消失しているが、これは必ずしも近現代だけにかぎられた話ではなく、中世・近世の土地開発によっても数多くの古墳が破壊されたと推測できるのである。というのは、この地域はいわゆる石棺仏とよばれる、石棺の部材に仏像を彫刻して石仏としてまつったものが数多くのこっているからである。すなわち、石棺仏の存在は、古墳そのものがその場所にあったことまでは保証しないものの、少なくともその周辺に古墳が存在していたことを裏付ける材料となる。したがって、こうした石棺仏の分布状況を把握することは、この地域における終末期古墳の分布を復元する重要な手がかりとなるのである。このような視点にたって検討をすすめた結果、神戸市北区から東播磨地域、とくに加古川下流域における分布状況の整理をおこなうことができた。さらに、具体的な事例検討として、これまでも調査をおこなったことのある石宝殿（兵庫県高砂市）や、竜山１号墳（同）の石棺などをとりあげ、竜山石の石工集団が飛鳥時代に播磨で活発な生産をおこなっていたことを確認した。つづく白鳳時代における石工集団の活動を示す遺例としては、古法華石仏（兵庫県加西市）が著名である。今回、これについてもあらためて調査をおこない、仏教波及という現象と、地域内生産活動（本研究では石材加工をさす）との連携について、在地の統治権力の動向をも視野に含めた見通しを得ることができた。

古代寺院の立地については、造営者側がなぜその場所を寺地として選んだのかという選地の問題に的をしぼって、官衙や官道、集落との関連、寺院に不可欠な瓦生産との関連などを視野に入れた検討をおこなった。その結果、国家仏教に通ずるモニュメント性や在地信仰、アクセス性の高低などのファクタによって、複数の選地パタンに類型化できることが判明した。さらに、７世紀中ごろには官衙に隣接したタイプが中心であったのが、７世紀後半には眺望、すなわち「見せつける」立地を意識した選地へと移り変わっていくこと、そして供給瓦の変化から、８世紀になると共通性の高かった加古川中下流域の寺院に独自性が見出されていく過程も明らかになった。

終末期古墳や古代寺院の造営主体となる古代豪族の問題については、史料の制約もあって詳細な解明は難しい。そこで、仏教受容記事に出てくる播磨の還俗僧、高麗恵便の動向を手がかりに検討をすすめた。恵便自体の実在性は考慮の余地はあるものの、関連記事をたどることによって、仏教受容と同時期に山林修行がみられていたこと、そしてそれらに渡来系氏族が密接に関わっていたことが明らかになった。ことに播磨の場合、山氏・山部が賀茂郡を中心に存在しており、実際にこの地域には古法華山（兵庫県加西市）、先述の古法華石仏など白鳳期の作品が集中することを想起すれば、山林修行の適地として展開していた可能性が指摘でき、山氏集団との関係のなかで、高麗恵便の伝承も相応の実在性を想定できた。

②開基伝承からみる中世寺院の展開と山岳信仰

兵庫県下の寺院について、近世・近代の地誌類をもとに集成をおこない、その沿革や開基伝承についての情報をデータベース化して整理することができた。播磨および丹波（旧氷上・多紀郡）、摂津西部（現在の兵庫県域）、但馬について情報の整理を完了することができ、このほか比較対照の一助として、因幡、伯耆（現鳥取県）、土佐（現高知県）などのデータも収集することができた。

法道仙人の開基伝承をもつ寺院の分布や特徴を検討した結果、①この伝承の分布は丹波から北播磨（加古川中流域）を中心とした山間部を中心とすること、②海岸部は少なく、西は飾磨郡（現在の市川流域）を越えず、東は明石郡以東になると散在的にしかみられないこと、③伝承をもつ寺院の宗派は圧倒的に真言・天台に集中すること、などが明らかになった。さらに、聖徳太子や行基、性空（書写山円教寺の開基）など、実在上の人物による開基伝承なども検討した結果、播磨地域では、海岸部を中心に行基伝承が濃密に分布しているが、飾磨郡に集中する性空伝承、摂津から東播磨の海岸部に多い聖徳太子伝承など、それぞれ特定の人物が寺院を開基した伝承がのこっており、それらが明確な地域性を伴っている状況が明らかになった。

つぎに、法道仙人伝承の具体的な内容について検討を加えることとした。既往の研究によって、法道仙人伝承は、法華山一乗寺の伝承が一種の＜正典＞として成立・展開していたことが指摘されている。伝承の根幹をなすのが、①観音信仰と法華聖、②仙人という属性にふさわしい時空の超越性や怪奇譚、③護法神・地主神による寺院建立の支持、の３点であるが、これらの要素がどの程度各地の寺院の伝承に取り入れられていたかを検討した結果、＜正典＞の構成要素たる①～③は完全にその通りには受容されておらず、むしろさまざまな改変がなされていたこと、とくに仙人のアイデンティティともいえる②の要素は希薄であったことが明らかになった。いわば、一乗寺でつくられた伝承に、各地の寺院それぞれ独自の要素が重ね塗りされた、伝承の重層性というものをともなって展開していたことが判明した。

③地域伝承と歴史的景観

加古川流域には、飛鉢譚にかかわる地名（高砂市米田など）や、法道仙人の事績とかかわる巨石や湧水など、さまざまな地域伝承がのこっている。これらは古くは近世の地誌にさかのぼるものもみられるが、現代ではその場所がわからなくなってしまったものもある。近世・近代の地誌の記述を手がかりに、現地踏査を重ねて、これらの伝承地の記録をおこなった。場所を特定できなかったものもあったが、可能なものについてはGISデータ化して記録することができた。そして、法道仙人の飛来伝承や開基寺院の分布データをもとに、GIS の観点から、伝承の流布過程のモデリングをおこなうことができた。

法道仙人伝承は播磨地域に濃密にのこっているが、他地方でも断片的に名前をのこす場所や寺院がある。兵庫県下の伝承や関連寺院との比較対照のために、そうした他地方の寺院等の踏査をおこなった。具体的には大分県羅漢寺、鳥取県長谷寺を訪問し、立地状況や伝承の内容、文化財などの調査を実施した。

これらをふまえて、ひとつの共通性として指摘できるのは、岩盤を露頭させた山地につくられた寺院であるという点である。もっとも長谷寺の場合、後世に移転してきたとする伝承があるのでなお留保すべきではあるが、羅漢寺の場合は、広大な露頭のうえに寺院が建立され、石窟寺院ともいうべき様相を呈している。ひるがえって兵庫県下をみれば、普光寺（兵庫県加西市）のようにその前身寺院が背後の岩盤を露頭させた山にあったと伝える寺院が散見されるし、ゆるぎ石や手形石、駒の蹄（いずれも兵庫県加西市）、先述の石宝殿など法道仙人伝承に巨岩や奇石との関わりが多いことも確認できたところである。詳細な検討はなお必要であるが、前項①の研究班の成果ともあわせ、法道仙人伝承の成立や展開のひとつの背景として、石の文化との関連が重要なポイントになりそうであるという見通しを得ることができた。

（２）得られた成果の国内外における位置づけとインパクト

以上述べた成果は、平成24(2012)年9月9日に、市民公開シンポジウム「法道仙人伝承と古代・中世の播磨」と題して公開する機会を得た。研究テーマそのものは、兵庫県の加古川流域というごく限られた地域に分布する伝承であるため、国外に対する位置づけに

ついて評価することはできないが、国内、とくに兵庫県に関する限り、地域住民の法道仙人に対する知名度は高く、100 名以上の市民の参加を得た。インターネット上においても、一般市民の手によるものとみられる、法道仙人ゆかりの寺院などを紹介するブログやホームページが多数みられ、そこで今回の成果が引用されている事例もある。本研究の学術的評価はなお今後に待つべきであろうが、得られた成果は、一般市民の自分たちが住む地域に対する興味関心に応えたものということができ、その点で相応のインパクトはあるものと考える。

（３）今後の展望と指針

本研究は、地域伝承という歴史学・考古学的にはやや扱いづらい対象をきっかけに、古代・中世の仏教文化やその背景を検討しようという試みであった。その成果は先述の通りであるが、なお課題があることは否めない。

その第一は、今回の成果で得られた多数の見通しを実証していく作業である。たとえば、石の文化と法道仙人伝承との関連性であるが、現段階では見通しの域を出るものではなく、十全な検証がなされたとはいいがたい。いくつかとりあげることができた他地域との比較から導き出された仮説でしかなく、今後は個別の調査事例を蓄積することで、検証作業をすすめていかなければならない。それに関連して、法道仙人伝承をもち、一方で、丹後地方に分布する麻呂子親王伝承ももつという妙高山神池寺（兵庫県丹波市）の調査を具体的なケーススタディとして着手するに至ったが、今回の研究期間のなかでは、調査許可の獲得や、調査日数や方法を検討するための予備的な踏査をおこない得たにすぎず、本格的な調査には至らなかった。

また伝承に関わる調査も、その地域性を明らかにし得たものの、その背景に関する検討はなお不十分である。ひとつ確実にいえるのは、法道仙人伝承展開の背景は単一の要因で説明できるものではなく、修験道や山岳信仰など、さまざまな宗教的要素が絡んでいることである。これらをひとつひとつ吟味して掘り下げていく必要があるが、これもまた今後の課題とせざるを得ない。

実証という点ではなお多くの課題を有するものの、本研究の最大の成果は、終末期古墳から古代寺院、中世寺院へと至る時間軸のなかで、それぞれの見通しが得られたこと、また通時的な背景として、巨石信仰や石の文化という要素が考え得ることを示すことができた点であろう。伝承という、ややもすれば非実証的とみなされる素材から、歴史学・考古学それぞれの具体的な論点を導き出すことができ、いくつかの整理をなすことができた点は、本研究の成果として特筆すべきものである。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計１２件）

① 櫃本誠一「播磨における終末期の古墳と被葬者」『法道仙人と古代・中世の播磨』、査読無、2012、1-9

② 古市晃「仏教伝来と播磨－高麗恵便をめぐって」『法道仙人と古代・中世の播磨』、査読無、2012、45-54

③ 福井亘「法道仙人伝承のデータベース化」『平成 24 年度日本造園学会関西支部大会　研究・事例報告発表要旨集』、査読無、2012、51-52

④ 福井亘「俯瞰から法道仙人を見る」『法道仙人と古代・中世の播磨』、査読無、2012、71-82

⑤ 梶原義実「加古川流域における古代寺院の動向」『法道仙人と古代・中世の播磨』、査読無、2012、27-44

⑥ 梶原義実「一宮の古代～古代寺院を中心に」『一宮の歴史と文化』、査読無、2012、26-31

⑦ 梶原義実「古代寺院と集落」『東海地方における古代の地域社会』、査読無、2013、1-2

⑧ 梶原義実「国分寺と造瓦」『国分寺の創建　組織・技術編』、査読無、2013、138-166

⑨ 梶原義実「出土瓦からみた尾張元興寺」『新修名古屋市史　資料編２』、査読無、2013、812-823

⑩ 中井淳史「書写山円教寺」『季刊考古学』121 号、査読無、2012、245-263

⑪ 中井淳史「開基伝承と播磨の寺院」『法道仙人と古代・中世の播磨』、査読無、2012、55-70

⑫ 魚津知克「石の宝殿と竜山１号墳、そして法道伝承」『法道仙人と古代・中世の播磨』、査読無、2012、15-26

〔学会発表〕（計３件）

① UOZU Tomokatsu, FUKUI Wataru,”An attempt to grasp of overall history-cultural heritages in Hyogo, Japan”WAC Inter-Congress: Heritage Management in East and South East Asia Beijing, Institute of Archaeology Chinese Academy of Social Sciences(IACASS), Jul 2011

② 山上雅弘・多田暢久・浜中邦弘・松村知也・中井淳史「播磨書写山円教寺の空間構造－縄張り調査と航空レーザ計測の成果から－」日本考古学協会第 78 回総

会、2012.5.27、東京
③　魚津知克「パブリック考古学とジオツーリズム」サイエンスアゴラ2012「ジオツーリズムとパブリックアーケオロジー」、2012.11.11、東京

〔図書〕（計１件）
①　櫃本誠一編『法道仙人伝承と古代・中世の播磨』、大手前大学史学研究所、2012

〔産業財産権〕
○出願状況（計０件）
○取得状況（計０件）

〔その他〕
ホームページ等
大手前大学史学研究所ウェブサイト
http://shigakuorc.nc.otemae.ac.jp/

６．研究組織
(1)研究代表者
櫃本　誠一（HITSUMOTO SEIICHI）
大手前大学・総合文化学部・教授
研究者番号：90340893
(2)研究分担者
古市　晃（FURUICHI AKIRA）
神戸大学・人文学研究科・准教授
研究者番号：00344375
福井　亘（FUKUI WATARU）
京都府立大学・生命環境科学研究科・准教授
研究者番号：60399128
魚津　知克（UOZU　TOMOKATSU）
大手前大学・史学研究所・主任
研究者番号：70399129
梶原　義実（KAJIWARA YOSHIMITSU）
名古屋大学・文学研究科・准教授
研究者番号：80335182
中井　淳史（NAKAI ATSUSHI）
大手前大学・史学研究所・研究員
研究者番号：80411768
(3)連携研究者
（平成23年度・24年度）
岡本　篤志（OKAMOTO ATSUSHI）
大手前大学・史学研究所・研究員
研究者番号：30438585